

教職大学院での2年間を振り返って

青嶋 舞

(授業力高度化コース第9期生)

1. はじめに

私は、学部での教育実習に行くまでは、教師を目指すのではなく別の進路を考えていた。教育実習で初めて子どもたちを目の前にしたとき、授業を考える難しさと同時に授業をすることの楽しさに気付いた。そして、子どもたちの日々の成長を間近で見られる教師という仕事に魅力を感じた。しかし、学部では主に食に関することを学んでおり、これまでに教師という仕事について真剣に学んだことがなかった。そこで、教師という仕事について勉強したいと思い、教職大学院に入学することにした。

2. 教職大学院の講義

講義では、学部で得られなかった教育についての専門知識や様々な考えを学び、今まで関わる機会のなかった他校種、他教科の人たちと意見交換やグループワークを行った。それぞれの校種、教科の特徴や考え方に触れることで、自分自身の教師観や教育観を考えるきっかけにもなった。また、現職教員院生と一緒に受ける講義では、現場の様子や苦労話を聞くことができ、講義で学んでいる理論（理想）と実際の現場（現実）のギャップのようなものを感じた。人を相手にする教師という仕事の難しさと、教育の奥深さを痛感し、教職大学院ならではの貴重な体験ができたと思う。

3. 教職専門実習

教職専門実習は、学部時代の教育実習とは大きく異なり、教科指導だけではなく校務分掌の仕事なども間近で見ることができ、教師の仕事の全体像や、学校全体における教師一人ひとりの役割や責任など、多くのことを学んだ。また、私自身の実習に対する意識も学部するときとは異なり、先生方の仕事の様子や姿勢もよく見るようになった。指導していただいた家庭科の先生が次のように話された。「教師は楽をしようと思えば楽をできる仕事だけれども、目の前の生徒のことを思って、少しでも生徒のためになることをと思えば、授業は毎日改良を重ね続けなければいけないし、そうでなければ生徒に失礼だ」。この言葉はとても印象に残っており、私もこの先生のような姿勢を持ち続けたいと強く思った。

4. 修了論文

実習で行った食分野の授業では、生徒の実践意欲を高めるような様々な工夫を実践した。この授業を基に修了論文では、「実践する態度を育成する授業の工夫」について考察した。授業後の生徒のコメントには、「その食品を食べる効果を学んで、もっと摂ろうと思えた」などがあった。今までなんとなくしてきた行為に意味付けされたことによって、さらに実践しようとしている生徒の様子を見ることができた。実習と修了論文の作成を通して、実施した授業を振り返ることの大切さを知り、「実践する態度を育成する授業」について、これからも考え続けていきたいと思う。

5. 悩んだとき

大学院での2年間は、時が過ぎるのが驚くほど早く感じた。しかし、この2年間は順調なことばかりではなかった。教師という仕事について、そもそも働くということについて、そして生きるということについて、答えのないことを考え続けて夜も眠れず、悩み続けた時期もあった。そんな時、私が真剣に悩んでいるということを見抜いて声をかけてくれ、たくさんの時間を割いて話を聞いてくれた素敵な友だちや、親身になって相談にのっていただいた先生方のおかげでここまでくることができた。悩みの渦の中にいたときは、明るい未来が見えずとても辛かったが、今思うと真剣に自分の気持ちと向き合った大切な時間だったと思う。また、多くの人に助けてもらったことは忘れることができない。自分も他人に対してそんな風にできる人間になりたいと思う。

6. おわりに

教師という仕事は、とても複雑で決まった答えはないと思う。しかし現場に出ると、何かしらの答えを出さないといけない場面にも遭遇するであろう。そんな時でも簡単に答えを出すのではなく、様々なことに思考を巡らせながら最適解を見つけないと思う。そして、その答えで満足せず、本当にそれでよかったのか、振り返ることを大切にしていきたい。また、教師という仕事は世の中にたくさんある職業の中の1つである。そのことを自覚しておかないと、学校という世界しか見えなくなってしまうような気がする。視野を広げて教育以外の世界のことに興味を持ち、積極的に関わっていく姿勢を忘れないようにしていきたい。また、子どもたちにも学校の外の世界のことに目向けられるようになってほしいと思う。

この2年間は、講義の内容や教職専門実習、修了論文はもちろんのこと、前にも述べた通り自分自身のことについても、深く考えた時間だった。多くの人と関わり、様々な考えに触れ、お互いの考えや感じていることを受け入れたり批判したりしながら、少しずつ成長できたのではないと思う。来年度から教師という仕事をするにあたり、謙虚な姿勢と感謝の気持ちを忘れず、この2年間で学んだことや考えたことを活かし、努力していきたい。